

## 「活力ある農山漁村づくり検討会」における検討状況について

## 1. 趣旨

人口減少社会を見据え、将来の農山漁村の姿を予測した上で、目指すべき農山漁村像を議論することが必要との認識の下、活力ある農山漁村づくりに向けたビジョンやその実現のための施策について、幅広い視点から検討を進めることを目的として、有識者からなる「活力ある農山漁村づくり検討会」を開催。

## 2. 委員

青山 彰久	読売新聞東京本社編集委員
安藤 光義	東京大学大学院農学生命科学研究科准教授
小田切 徳美（委員長）	明治大学農学部教授
沼尾 波子	日本大学経済学部教授
藤山 浩	島根県中山間地域研究センター研究統括監
松永 桂子	大阪市立大学大学院創造都市研究科准教授

## 3. これまでの検討状況

第1回 平成26年7月23日（水）

議題：① 活力ある農山漁村づくりに向けたビジョンについて  
② 今後のスケジュールについて

第2回 平成26年8月25日（月）

議題：農山漁村の活性化の取組について

- ・ 定住促進の取組
- ・ 地域内経済循環の取組
- ・ 地域の暮らしを支える取組

第3回 平成26年9月26日（金）

議題：① 農山漁村の活性化の取組について

- ・ 集落機能の集約（拠点づくり）の取組
- ・ 都市と農山漁村の交流の取組
- ・ 地域資源を活用した新たな取組

② 論点整理（案）について

第4回 平成26年10月31日（金）

議題：① 地域づくりに取り組んでいる団体からのヒアリング

- ・ つねよし百貨店（京都府京丹後市）
- ・ 鉦打（なたうち）ふるさとづくり協議会（石川県七尾市）

② 論点整理（案）について  
③ 今後の検討会の進め方について

## 4. 今後の予定

今後更に議論を深め、年内に中間取りまとめを行い、来年3月までに、新たな食料・農業・農村基本計画の策定と併せ、活力ある農村漁村づくりに向けたビジョンを策定する予定。

# 活力ある農山漁村づくり検討会 ＜論点整理＞

平成26年11月11日

## 1. 「田園回帰」の動きの広がり

農山漁村では、人口減少・高齢化が都市に先駆けて進行する一方で、一部の地域において、地元志向の若者の定住や都市の若者・女性の転入の増加により、人口が社会増となる現象がみられる。これらの若者は、農山漁村に新たな価値を見出し、地域の新しい担い手として様々な分野で活躍している。

このような「田園回帰」といえる新たな動きは、どの程度の空間的・時間的な広がりをもっているといえるか。また、農山漁村の活性化に向けた新たな可能性を作り出すきっかけとなり得るか。

### ＜田舎暮らしのライフスタイル＞

- 都市住民の農山漁村への定住願望が、若い世代を中心に増加傾向にあるが、どのような人たちが、何を求めているのか。このような傾向は、どういった時間軸で農山漁村への移住・定住数の増加を実現し、社会構造を変化させると考えられるか。

特に、バブル崩壊後の長期にわたる景気低迷・デフレにより、非正規雇用者が増大するなど、我が国の社会経済環境が大きく変化しつつある中で、東日本大震災からの復興などを契機に、若者の間で田舎暮らしの新しいライフスタイルを見出そうとする動きがみられるが、このような動きは今後も持続・拡大すると考えられるか。

### ＜多面的機能の維持・発揮への貢献＞

- 農山漁村を志向する「田園回帰」の動きが、今後、社会的・持続的な潮流となっていくことにより、我が国の人口減少問題の克服にどの程度貢献できると考えられるか。さらに、農山漁村に人口を取り戻し、地域のコミュニティ機能を維持・活性化することは、国土の保全や水源のかん養等の多面的機能の維持・発揮や、さらには、地域に受け継がれてきた技能・文化の継承にどのように貢献できると考えられるか。

### ＜「田園回帰」を促す取組＞

- 人口の社会増減の現象には、同一県内でも市町村ごとに、また、同一市町村内でも地区ごとに大きなバラつきがみられるが、その背景には何があるのか。例えば、首長・自治体や地域コミュニティの移住者受入れへの熱意、先輩移住者の情報発信、地元で起業・就業できる環境等の充実度合いの違いなどがポイントなのではないか。また、移住希望者が地域の仕事や暮らしに関する情報を入手でき、「お試し」的に現地で暮らせる環境の有無などもポイントではないか。

## 2. 地域資源や人材を活かした地域経済の活性化

農山漁村の活性化を図るためには、担い手への農地利用の集積・集約化等を進め、農林水産業を成長産業とするとともに、地域における所得の向上と雇用の確保を図ることが重要である。

このためには、地元の農林水産物やバイオマス資源など多様な地域資源を活用した6次産業化の取組を推進するとともに、観光、福祉等の分野との連携強化等による雇用創出を進めることによって、担い手以外の農林漁業者や地域住民、更には「田園回帰」を志向する都市からの移住者も対象として、地域における就業機会を確保する必要があるのではないかと考えられる。

### <「地域内経済循環」の構築>

- ▶ 地域の農林漁業者が主体となって農林水産物の6次産業化を進め、地域資源の高付加価値化に取り組むことによって、域外に流出していた価値を域内に再投資する「地域内経済循環」のネットワークを構築することは、一定の圏域内の地域経済を潤していく上で重要であると考えられる。

近年では、全国流通しない未利用農林水産物を地元で加工したり、未利用資源を活用したエネルギーの地産地消に取り組むなど、地方自治体や民間団体が一体となって、地域内で経済を循環させる活動を進める事例が増加しているが、このような新たな動きは、どの程度の地域的な広がりをもって経済面でのつながりを強めることができると考えられるか。

また、これらの取組を通じた産業創出や農林漁業の周辺産業の農山漁村への取込みによって地域経済を活性化させることは、農山漁村における雇用創出や若者の移住・定住の促進にどのようにつながると考えられるか。

### <社会的企業の新たな取組>

- ▶ 若い世代の人々が、地域資源を活用して小さなビジネスを起こしつつ、民間主体で地域の課題解決に取り組み、地域コミュニティの活性化に寄与する、いわゆる「社会的企業」(ソーシャル・ビジネス)を興している事例がみられる。

地域社会への貢献を主たる事業目的としつつ、同時に、ビジネスで得た利益で事業主体の維持を図るといった、このような新たな動きは、地域経済と地域コミュニティの活性化に継続的に取り組むことのできる事業形態として、積極的に評価することが必要ではないかと考えられる。

また、このような事業を担う人材が活躍できる環境を作ることは、農山漁村における雇用創出や若者の移住・定住にどのようにつなげることができると考えられるか。

#### <農山漁村で活躍する多様な人材>

- 都市で社会経験を積んだ者が、地域に埋もれた未利用資源を再発見したり、地域住民に受け継がれてきた技能・文化を再生するなど、地域資源の可能性を見出して新たなビジネスを展開するなどにより、農山漁村で活躍している事例がみられる。

このような多様な人材の活躍を積極的に評価し、地域経済の活性化につなげていくことが必要ではないか。また、どのような環境下でこうした人材が最も活躍できると考えられるか。

#### <女性農業者の活躍>

- 女性農業者は、消費者ニーズを汲み取る力、コミュニケーション能力などを活かして生産現場や6次産業化等の取組において重要な役割を果たしている。特に、女性が参画している農業経営体は販売金額が大きく、売上や収益力が向上する傾向も見られる。

このような女性農業者の能力を最大限に活かし、将来の農山漁村のリーダーとして、様々な場面で活躍できる環境を整備することが求められているのではないか。

### 3. 地域のコミュニティ機能の維持・発揮

農山漁村の多くの集落で、人口減少・高齢化が著しく進行する中で、地域全体のコミュニティ機能を維持・発揮し、農山漁村ににぎわいを取り戻すためには、どのような地域の将来像を描くべきか。また、関係府省が進める地域政策とどのように調和をとって推進していくことが適当か。

#### <美しく活力ある農山漁村づくりを進める土地利用>

- 農山漁村における移住・定住を促進し、にぎわいを取り戻すためには、住みよい生活環境の構築や雇用・所得の確保が求められることに加え、地域住民が主体的に関わることを通じて、人口減少社会においても地域の活力が発揮できる整序化された土地利用を実現することにより、住民が誇りをもてる美しく活力ある農山漁村づくりを進める必要があるのではないか。

#### <拠点への機能集約>

- 医療、介護、教育、子育て等の生活サービス機能を基幹集落に集約し、周辺地域とネットワークでつないだ「拠点＋ネットワーク」を形成するとともに、地域資源を活用した6次産業化や都市農村交流等の機能に関しても、農林水産物加工・販売施設や農家民宿案内施設等を集約することにより、「拠点」を中心として地域全体に人・モノ・サービスを届けるといった流れを創出し、農山漁村ににぎわいを取り戻すことが重要ではないか。

#### <地域の暮らしを支える取組>

- 農林水産業の活性化や地域資源の維持活動を行う民間団体等が、近年、農産物の庭先集荷や高齢者への声かけ、買い物支援等の地域の暮らしを支える役割も担っている事例が見られる。

このような地域の暮らしを支える組織の取組については、従来から集落が担ってきたコミュニティ機能を補完するものとして、さらには、行政機関が実施してきた公共サービスの一部を住民が主体となって担うものとして、積極的な意義付けをすべきではないか。また、これらの取組をより活発化させ、地域のニーズに応じ広く普及させていくためには、どのような方策が必要か。

#### <多面的機能を効果的に維持・発揮させる取組>

- 集落機能が著しく低下することにより、農地等の管理が困難となり、耕作放棄や鳥獣被害などの増加が危惧される中で、集落間の連携による農地等の共同管理や地域ぐるみの鳥獣被害対策により、国土の保全等の多面的機能を効果的に維持・発揮させることが必要ではないか。

また、人口減少・高齢化が急激に進行する集落にあっては、将来にわたって安定的に多面的機能を維持・発揮させる方策として、周辺集落と連携して農地等を共同で維持・管理するとともに、他の地域の担い手が通い耕作を行うといった営農形態についても、積極的な意義付けをしてはどうか。また、このような営農形態における、担い手と集落の農業者や農業者以外の住民との役割分担のあり方についても、議論が必要ではないか。

#### 4. 都市と農山漁村のつながり

農山漁村のコミュニティ機能を維持・発揮することは、その地域の住民のみならず、都市住民を含め国民全体にも様々なプラスの効果を与えるのではないかと。

また、都市住民が農山漁村とのかかわりを持つことは、農山漁村においても様々なプラスの効果を生むのではないかと。

##### <都市と農山漁村の相互補完関係>

- 農山漁村は、食料の安定供給に加え、エネルギーや水資源の供給、災害の防止、国民の自然教育・学習の場の提供など、様々な役割を担っている。

このように、都市住民を含め国民全体が、農山漁村から様々な恵沢を享受していることについて、改めて国民全体で認識を共有し、都市と農山漁村の結びつきの重要性への理解を深めるべきではないかと。

さらに、都市と農山漁村は経済的にも社会的にも切り離すことのできない相互補完関係にあることを理解した上で、都市も農山漁村も、それぞれの個性を発揮して「地方の自立」を実現していくことを目標に、必要な方策を考えるべきではないかと。

##### <都市と農山漁村の結びつきの強化>

- 都市と農山漁村の交流は、農山漁村に対する都市住民の理解を深めるとともに、農山漁村で暮らす人々にとっても、地元で埋もれた地域資源や住民に受け継がれてきた技能・文化など地域の魅力の再発見のきっかけとなるものである。

近年では、子どもの農山漁村での宿泊体験やグリーン・ツーリズム等の取組が活発化しており、農家民宿や農家レストラン等も増加傾向にある。

さらに、地方自治体間で協定を締結し、定期的な住民の交流を進めたり、大学・企業と連携した交流プログラムを開発する事例がみられるほか、都市住民が災害に見舞われた場合に備えて農山漁村との結び付きを強化するなど、組織的な交流の取組も増加している。

このような都市と農山漁村の結び付きの強化は、都市・農山漁村交流を一過性のブームに終わらせないためにも、積極的・戦略的に進めていくべきではないかと。

##### <多様なライフスタイルの選択肢>

- 都市と農山漁村の交流の機会を提供することは、都市住民が農山漁村の暮らしや農林水産業への興味を抱くきっかけとなって、さらに進んで、農山漁村に接する機会を増やし、最終的に移住・定住を選択する者を増やすことにつながる。

また、移住・定住には至らなくとも、農山漁村を頻繁に訪れたり、都市と農山漁村の二地域居住を始める者の増加も期待されるほか、農山漁村から他出した者がUターンの可能性を考えるきっかけともなり得る。

このように、都市と農山漁村の交流が、都市と農山漁村の双方の住民にとって、多様なライフスタイルの選択肢を広げることにつながる点を積極的に評価すべきではないかと。

以上